Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

三木市における地域歴史文化の〈場〉 : 三木古文書研究会と市史編さん(<特集>地域歴史文化をめぐる〈場〉 : つながりを生み出す環境づくり)

進藤, 輝司
川内, 淳史

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,9:26-36

(Issue Date)
2017-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010054

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010054

KOBE UNIVERSITY

三木市における地域歴史文化の〈場〉

――三木古文書研究会と市史編さん――

進藤輝司・川内淳史

はじめに

三木市では現在、約半世紀ぶりの市史編さん事業を進めているが、新しい市史では単に最新の調査研究成果を反映させるだけではなく、編さん事業自体を市民協働のまちづくりの一環として行うことで、特色を持った市史として編さんを進めている[1]。こうした市史編さん事業が行われている背景には、後述のように三木市において地域の歴史文化に関わる活動が、市民が主体となって盛んに行われていることが関係している。このような市民が主体となる地域歴史文化活動はいかにして可能になっているのか、本稿ではその条件を地域歴史文化の〈場〉として位置づけ、三木市における地域歴史文化の〈場〉のあり方について考えてみたい。

まず第一節では、郷土史研究団体である「三木郷土史の会」を母体として設立され、現在でも活動を継続している「三木古文書研究会」の紹介を通して、市民主体の地域歴史文化活動について述べたい。続く第二節では、現在進められている市史編さん事業について述べるとともに、その背景にある三木市における地域歴史文化の〈場〉のあり方について考察を加える。なお本稿執筆にあたっては、第一節を進藤、第二節を川内が担当した。

一　古文書の解読を通じて市民文化の向上に貢献

――「三木古文書研究会」の活動内容を中心として――

「三木古文書研究会」は、二〇〇四年五月八日に発足した。

しかしその前身は、「三木郷土史の会」が一九八三年九月一一日から月二回始めた「古文書を読む会」である。

この「古文書を読む会」は、郷土の歴史を勉強する一環として始めたもので、二〇〇四年三月末に三木郷土史の会が解散するまで二〇年間続いた。その間、『三木市有宝蔵文書』全八巻の解読、編集、出版業務をはじめ、〝大庄屋日記〟ともいうべき『累年覚書集要』の解読など、郷土歴史資料の蓄積に努めてきた。

そこで、これら三木郷土史の会の目的やその主な事業、とりわけ古文書に関する事業の概要を振り返りながら、「三木古文書研究会」の活動内容を中心に述べてみたい。

（一）「三木郷土史の会」の目的と事業

一九七八年三月二五日、郷土の歴史に関心のある方々四九名が三木市中央公民館に集まって設立総会を開いて「三木郷土史の会」という団体が誕生した[2]。私（進藤）も役員（幹事）の一人として参画し、以来、三木郷土史の会が二〇〇四年三月三一日に解散するまでの二六年間、継続して役員を務めた。会員数は初年度末の一九七九年三月では百数十名に増え、数年後のピーク時には約二三〇名に達した。

この三木郷土史の会の目的は、三木市、吉川町（当時）及び神戸市北区淡河町（旧美嚢郡）とその周辺市町等の歴史を調査研究することを掲げ、その事業として①郷土歴史の調査研究、②実地見学会の実施、③会誌、研究記録の発刊、④他の同好団体との情報交換、⑤会員相互の親睦、という五つの事業を中心に展開してきた。



写真　古文書を読む会

「古文書を読む会」始める　その事業の中で、一九八三年九月一一日、三木郷土史の会主催、三木市立図書館後援で「古文書を読む会」がスタートした。三木郷土史の会会員及び一般に呼びかけて最初三四名の会員で、月二回、一回につき二時間、主として近世文書というか江戸時代の古文書の解読を約二〇年間続け、私（進藤）も後半の八年間、講師役を務めた。

『三木市有宝蔵文書』の解読、編集等　その間の一九九二年六月一七日、三木市から「市が所蔵している一六〇〇点余の江戸時代の古文書を、郷土史家ら数名が一九七四年から一七年かけ

て約八〇％解読されているので、その残りの解読と編集業務、そして本にして出版する一切の業務を三木郷土史の会に委託したい」との申し出があった。早速、三木郷土史の会では役員会を開催し、種々協議の結果、この申し出を受託することに決定した。そして、三木郷土史の会と古文書を読む会のメンバー十数名で「宝蔵文書出版事務委員会」を立ち上げ、同年七月一日からこの大事業に取りかかった。

私は、主として未解読の古文書の解読、編集業務の段取りをする一人として一〇年間、一週間に二回、午後の三時間、三木市立図書館の一室で取り組み、『三木市有宝蔵文書』（全八巻）として二〇〇二年三月の完成に努めた（ちなみに「三木市有宝蔵文書」という「題字」（行書体）は、僭越ながら私（進藤）が筆を走らせた）。

〝大庄屋日記〟ともいうべき『累年覚書集要』の解読、編集　また一九九一年五月二二日、当時、大阪市天王寺区在住の安福正彦氏から三木市立図書館に『累年覚書集要』の写しが寄贈された。これは、江戸時代の明石藩三木郡小川組大庄屋安福家当主が、延宝三（一六七五）年から文政一三（一八三〇）年まで七代、一五五年間にわたって書き継がれてきた、いわば〝大庄屋日記〟ともいうべき貴重な史料である。

寄贈を受けた所管の三木市教育委員会は、三木郷土史の会に解読、編集業務等を依頼、同会はこれを受託し、「大庄屋文書調査研究部会」を設け、宝蔵文書の解読や編集作業と一時「同時進行」という形で解読、編集業務を約一年有余年にわたって進めた。そして、一九九四年九月一日、三木市教育委員会から『累年覚書集要―明石藩三木郡小川組大庄屋安福家七代の記録―』（B五判、三五四ページ）として発刊されたのである。このように一〇年間という長期間にわたって三木郷土史の会会員及び古文書を読む会のメンバーの果たした役割は非常に大きかったと思う。

（二）「三木古文書研究会」へと継承

三木郷土史の会が解散した二〇〇四年三月、私は「古文書を読む会だけは何としても残したい、継続したい」という強い思いから広く一般に会員募集をし、三木郷土史の会が解散した二か月後の同年五月八日に「三木古文書研究会」という名称に変更して継続することができた。最初の数年間は、私（進藤）と横山弘（ひろむ）氏（元三木郷土史の会幹事で古文書を読む会会員）の二人で講師役を務めたが、そのうち十数名の会員が相当解読されるようになり、今年で一三年目を迎えている。

この研究会の目的は「図書館が所蔵する古文書や市内外の古文書の解読を通じて市民文化の向上に貢献すること」を掲げ、その事業の一つに三木市又は公共的な事業に参加する項目を入れ、月二回、第二・第四土曜日の午後一時三〇分から三時三〇





写真　三木古文書研究会

分まで三木市中央図書館で古文書の解読を楽しみながら相互研究している。

さて、前置きが長くなったが、三木古文書研究会が現在、公共的な事業にボランティアとして参加、活動している内容は次のとおり。

襖下張り文書の解読と目録づくり　まず一点目は、三木市本町二丁目にある「旧玉置家住宅」で二〇一〇年七月から神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの指導のもと、私（進藤）を含めて数名の会員が月二回、第一・第三金曜日の午後一時から四時までの三時間、襖下張りの文書を中心に解読と目録づくりに取り組んでいる。はじめの四～五年は、当時神戸大学の板垣貴志氏（現島根大学法文学部准教授）から指導を受け、二〇一五年からは私たち古文書研究会のメンバーのみで頭をかかえながら解読と目録づくりボランティアを続けている。



写真　三木古文書塾

なお、この「旧玉置家住宅」というのは、文政九（一八二六）年上州館林藩（現群馬県）が財政建て直しを図るため、飛び地領であった播州三木に切手会所（今の銀行）として建築されたもので、二〇〇二年「国登録有形文化財」として登録され、三木市観光協会が利活用しているものである。

初心者向けの「三木古文書塾」開設　二点目は、この「旧玉置家住宅」の奥座敷を利用して二〇一五年九月から月一回、第三

水曜日の午前一〇時から正午までの二時間、初心者を対象に「三木古文書塾」を市観光協会主催で開設され、その講師として私を含めて五名の会員が関わっている。

「兵庫歴史研究会」の古文書教室に講師を派遣　三点目は、神戸市をはじめ三木市など周辺都市の会員で構成されている「兵庫歴史研究会」という団体が、その事業の一つとして「古文書教室」を毎月第一日曜日午前一〇時から正午まで兵庫県民会館（神戸市中央区）で開催されている。その講師として数年前から会員二名を派遣している。もちろん教材の選定を含めてである。私も最初の約二年間講師を務めた。



写真　市史編さんボランティア

「市史編さんボランティア」に参加　四点目は、二〇一六年四月、三木市教育委員会が古文書の解読や目録の作成などに協力できる「三木市史編さんボランティア」を募集された際、私たち会員が十数名応募した。それも三木市民の会員だけでなく、神戸市や高砂市、小野市、加東市の会員も自主的に参加の意思を表明してくださった。そして同年六月から江戸時代の古文書や明治・大正・昭和の近現代文書の解読や目録づくりに取り組んでいる。

日程は、二〇一六年六月から一〇月までは毎月第二・第四水・木曜日の二回、同年一一月からは第一、第三水、木も加わり、毎週一回、水曜・木曜班に分かれて参加している。

（三）小括

以上のように三木古文書研究会は、古文書の解読や目録づくりを通じて、歴史を学びながら明日へのまちづくりに、市民文化の向上に貢献すべく地道な活動を続けている。また主として江戸時代の「御家流」の文字で書かれた古文書が相当読める人を増やしたい、という願いがある。そのため「三木古文書塾」での会員が増えてほしい。更に今後も月二回の例会（勉強会）で解読実践を重ねていきたい。

そして、何よりも新しい三木市史編さん事業が本格的に進む中、ボランティアとしてなお一層協力していきたいと思っている。

二　住民による歴史文化活動と新市史編さん事業

次に、現在、神戸大学大学院人文学研究科と三木市との連携で進められている「新三木市史編さん事業」の経緯および概要を述べるとともに、三木市における住民主体の地域歴史文化に関わる活動が、これまでいかなる〈場〉を形成し、またその動きを受ける形で展開される市史編さん事業がいかなる〈場〉を形成している（あるいは形成していきたいと考えている）かについて検討したい。

（一）新三木市史編さん事業について

大学と市の連携による新市史編さん事業は、二〇一三年に締結された包括連携協定を受けて、市制六〇周年を迎えた二〇一四年よりスタートされた。同年四月より大学と市との間に交わされた「受託型協力研究」として市史編さん事業を開始し、神戸大学からは担当教員一名を派遣した。さらに、二〇一五年に市史編さん事業の主管が企画総務部総務課から教育委員会文化スポーツ振興課に移管されるにおよび、市教委と大学とによる市史編さんの事務局が組織された。二〇一六年五月には、「三木歴史・文化の杜構想」（二〇一二年六月策定）に基づいて「時空の拠点・まちづくりの拠点・情報発信の拠点」として開館された「三木市立みき歴史資料館」の二階に市史編さん事務室・整理室を設置するとともに、同年度に市史編さん委員会および通史編・地域編の二つの専門委員会を発足させ、本格的に事業を遂行する体制を整えた。

新市史編さん事業は、二〇一四年度から二〇二九年度までの一五年計画で実施され、構成は「通史編」と「地域編」の二本柱で計画されている。このうち「通史編」については神戸大学を中心とした大学研究者が中心となる時代別・分野別部会を組織し、①前回の自治体史（『三木市史』、『吉川町誌』ともに一九七〇年刊行）の編さんから既に半世紀が経過していること、②この間、研究の進展や新しい史料の発掘が進んでおり、それを踏まえた今日的な水準での歴史の見直しが必要になってきていること、③また約半世紀の間、高度経済成長期における地域社会のあり方の変化や、三木市と吉川町が合併するなど、市域のあり方に大きな変化があり、そのことを踏まえた市史編さんが必要となっているとの観点より、これまでの『三木市史』、『吉川町誌』などの研究成果を活かしつつ、学術的水準の高い市史を編さんすることをねらいとしている。「通史編」については「本編」と「資料編」からなる全一〇巻を編さんする予定であり、またその他、調査研究成果を市民が利用しやすい形で提供していくことを念頭においている。

一方「地域編」については「市民が主役となる市史編さん」

を掲げて、調査研究から執筆までを地域住民が中心となって編さんするものである。こうした住民が主体となる自治体史編さんの試みは、すでに香寺町（現姫路市香寺町）において行われているが、旧来からの地縁性が残された旧町村部から戦後開発されたニュータウン地区まで、歴史的にも地域的にも様々な特色のある三木市域においては、地域的特色を活かしながら、各地域に相応しい「地域編」のあり方をそれぞれ模索していく必要がある。「地域編」の編さんにあたっては、市内公民館区ごとに地域部会を組織し、地域住民が部会員として編さん事業に参加する。すでに二〇一七年二月には、口吉川地区において部会が組織され、月一回程度の研究会を開催、地域の歴史記録の再検討や地域調査を実施している（その後、二〇一七年一一月に志染部会も立ち上げ）。

これらを総合し、研究者のみならず住民自身が自治体史編さんの過程に関わっていくことにより、編さん事業そのものを「まちづくり」の一環として位置づけようというのが、今回の市史編さん事業の大きなコンセプトのひとつとなっている。

（二）歴史文化に関わる三木市民の活動と行政・大学

以上のような市史編さんを行っていく上で、これまで三木市で展開されてきた歴史文化に関わる地域活動が重要な意味を持っている。今日の三木市における住民主体の地域活動の原点として位置づけられるのが、第一節で述べた「三木郷土史の会」の活動である。前述のように三木郷土史の会では、活動の過程で様々な地域の歴史や史料の掘り起こしを進めてきたが、その際に意識されていたのが、地域の歴史の中に、かつて地域に暮らした「人」の姿を見出そうとした点である。会誌『三木史談』二六号の「編集のあとに」には、会員に対して地域の歴史の中の「小さなテーマ」を見つけて報告されるよう呼びかけられるとともに、次のような文章が寄せられている[3]。

特にお願いしたいのは、目に見えない、記録も余り残らない、しかも、どんどん消えてゆく事柄です。お年寄りの頭に宿っている村や町の姿は、書き残しておかねば、子孫に顔向けが出来ないとも心配します。それらも現実の生活に来たす程のことはないでしょう。しかし、ふるさとの成り立ちに目を向け、先人の生き方から未来を展望しなければ淋しい限りです。現在の人々が、どんなに新しい物を造っても、その土台は先人の営みを踏み台にしているのですから。現在の村や町の姿は、俺たちの創造だと考える方があれば、それは全くのうぬぼれでしかありません。（中略）例えば「道」一つをとって見ましょう。そこには新旧の差があり道幅の違いがあります。なぜ新しい道を作るか、旧道はなぜ山裾を曲がりくねってついているのか、地蔵様や道標が何故、旧道に沿うているのか、衰亡のあとは住民の

意志によって推移していることがわかります。これも一つの歴史といえないでしょうか。

前述のように、同会の活動は二〇〇四年にその幕を閉じたのであるが、同会の事業であった「古文書を読む会」を「三木古文書研究会」として継続させたことは、地域における歴史文化の担い手を養成し、活動を持続させる〈場〉として大きな意味を持った。

こうした郷土史の会―古文書研究会が維持・継続してきた三木における歴史文化の〈場〉をさらに発展させた活動が、旧玉置家住宅における襖下張り剥離・解読作業である。[4] 二〇一〇年三月に結成された市民グループ「旧玉置家文書保存会」は、三木市高齢者大学大学院修了者と古文書研究会のメンバーを中心に設立され、三木市商工観光課や三木市観光協会の運営サポートを受けつつ、国登録有形文化財である「旧玉置家住宅」において玉置家およびその他市内旧家に残された襖の下張りとして眠る地域史料を掘り起こす活動を続けている。同会の活動には技術指導として文化財修復家の尾立和則氏が関わり、また神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが活動協力を行っている。

旧玉置家住宅におけるこうした活動は、これまで三木市で行われてきた住民主体の地域歴史文化活動を、行政・大学・専門家が関与することでさらに発展させ、より大きな〈場〉として構築される過程であった。さらに活動場所である旧玉置家住宅では、保存会の活動を契機に、神戸大学古文書合宿が毎年開催されたり、また古文書研究会の新たな試みとして「三木古文書塾」が展開されたりするなど、三木の歴史文化を創り出す空間としての〈場〉にもなっていったことは特筆すべきことである。人のつながりの〈場〉が空間としての〈場〉を生み出し、さらにその空間が人のつながりをさらに広げる事例であるといえよう。

市史編さん事業開始後に組織された「市史編さんボランティア」も、上記のような活動の延長線上にあるものである。第一節で述べたように、市史編さんボランティアにはこれまで古文書研究会―旧玉置家文書保存会でも活動してきた担い手が参加すると同時に、市史編さん事業に興味・関心をもつ新たな担い手が参加しており、参加者は三木市内にとどまらない。また、市史編さん事業の一環として二〇一六年一〇月に三木市立みき歴史資料館講座として実施した古文書入門講座「はじめてのくずし字」では、初めてくずし字に触れる多くの参加者を得た。参加者の中には、この講座をきっかけに三木古文書塾への参加を行っている事例もあり、市史編さん事業が地域活動の担い手を掘り起こし、実際の活動へと橋渡しをする役割を担っている。

（三）三木市の歴史文化における市民・行政・大学協働の〈場〉としての市史編さん

以上を踏まえ、最後にこれまで三木市において形成されてきた地域歴史文化の活動をめぐる〈場〉についてまとめるとともに、今後、市史編さん事業で展望される〈場〉について述べたい。

地域の歴史文化をめぐる市民活動の展開とその蓄積　まず、第一節でも示されたとおり、三木市には郷土史の会から旧玉置家文書保存会に至るまでの、地域住民が主体となった持続的な活動があったことが確認される。このことは地域住民の立場で郷土史の会からの活動を継続し、三木市の歴史文化を支えてきた人びとの存在と、その後に活動に参加し、主体的に（そして楽しみながら）活動を続けてきた人びとの力が大きかったことは言うまでもない。

一方でこうした活動を継続する上で重要な役割を果たしたのが、活動場所の提供を含めた行政によるサポートであったことは明記しておく必要があろう。住民に最も近い場所にいる〈他者〉である行政が、その活動に一定の理解を示しサポートを行うことは、地域歴史文化の〈場〉を形成するうえで重要なファクターであると考える。

「歴史文化を活かしたまちづくり」を目指す行政の対応　住民とともに歴史文化の〈場〉を構成する役割を果たす行政であるが、特に近年の三木市における行政の役割として特筆すべきことは、行政で陥りがちな縦割りの論理を越え、市長部局（商工観光課→旧玉置家住宅）と教育委員会（文化スポーツ振興課→市史編さん事業）とが、部局を越えて歴史文化に関わる連携を行っていることである。たとえば三木市商工観光課の辻田政顕は、同課による旧玉置家住宅でのボランティア活動へのサポートに関して、次のように述べている[5]。

> この旧玉置家住宅に関しましては、観光交流拠点ということで、一般の方々に公開させていただいている住宅となっています。（中略）このような（市民ボランティアによる―引用者注）活動を通じまして、旧玉置家住宅では人と人との交流が盛んに行われることで、市民が主体となったまちづくり、地域づくりが実践できていると考えております。今後も継続していくことで、そういった環境づくり等の活動の支援を行いながら、有意義な活動ができる場としての提供に力を入れていきたいと、三木市としましては考えております。（傍線引用者）

すなわち旧玉置家での活動について商工観光課では「人と人との交流」や「市民が主体となったまちづくり、地域づくり」を主要な目的として、事業を実施しているのである。その一方で、旧玉置家文書保存会の活動で新たに見出された史料については、今後、市史編さん事業で活用していく予定をしており、こ

のように観光振興・まちづくりを担当する商工観光課と、文化行政を担当する文化スポーツ振興課が、両者の事業ミッションを歴史文化の〈場〉に持ち込むことで、協同した市民活動のサポートを実践しているのである。

地域社会と大学の関わり　また、そうした住民活動と行政との連携の輪に大学が関与することにより、相乗効果によって歴史文化の〈場〉がさらなる可能性を拡げている。たとえば神戸大学では前述のように、人文学研究科が中心となって市と連携した市史編さん事業を実施すると同時に、それと連動する形で日本史学専攻による「古文書合宿」の実施や、また社会学研究室による地域社会調査を展開している。またそのほか神戸芸術工科大学では、三木市観光協会などと連携して、市内の歴史遺産活用イベント「ミキシル（三木のことをもっと知るためのプロジェクト）」を実施している。(6)

こうした地域の歴史文化の〈場〉への大学の関与により、大学側が蓄積してきた〈専門知〉と地域社会の側にある〈市民知〉の往還がなされる。そのことは、〈専門知〉によってなされる学術的な歴史研究の成果と、地域住民による「生活者」の視点よりつむがれてきた「歴史認識」が相互交流を行い、総体としての地域史がより活性化されることにつながる。また、それと同時に大学側が学生教育の〈場〉として地域社会に位置づけることにより、将来の研究者ないしは生活者としての学生が、「歴史」を通した地域社会への関わり方を実践的に身に着ける〈場〉として機能する役割も果たし得る。

以上を総合し、今後の三木市史編さん事業ではこうした市民・行政・大学の関係を維持しつつ、相互に影響し合う〈場〉を形成していくことが、「地域歴史遺産」の概念を具体化した自治体史編さんへとつながっていくものと考えている。

おわりに

以上本稿では、三木市における歴史文化の〈場〉のあり方について、三木郷土史の会の活動から市史編さん事業までを通して概観してきた。総じて言えることは、三木市の歴史文化の〈場〉とは、地域の歴史文化に関わる様々な主体による「歴史実践」の積み重ね（ないしは相互交流）によって創られてきたということである。「歴史実践」とは、オーストラリア先住民のアボリジニのオーラルヒストリーを行ってきた穂苅実によって提唱されたテーマであり、日常において歴史とかかわる諸行為を指すものであり(7)、近年、歴史学界においても注目されるテーマとなっている(8)。こうした点からすると、現在の三木市における歴史文化の〈場〉の有様は、三木郷土史の会の活動をはじめとする市民による「歴史実践」の蓄積を前提としながら、行政と大学がそこに関わることにより玉置家住宅での活動や、住民主体

の「地域編」を持つ新たな市史編さん事業へとつながっていったものと言えよう。

また同時に、こうした三木市における「歴史実践」は、地域の歴史文化をとおした、新たなコミュニティの形成を推し進めるものとしても捉えられる。前述のように、三木郷土史の会で解読・編集を行った「宝蔵文書」は、近世三木町より受け継がれつつ、現在も年一回の虫干し行事を通じて、それが現在の三木市民のアイデンティティを構成する要素として確認され続けている(9)。こうした「宝蔵文書」を通じた「歴史実践」を前提としてある三木市の歴史文化の〈場〉に、旧玉置家住宅での活動や市史編さんボランティア活動を通じて大学や新規移住者、また他地域の居住者が関わることにより、三木地域の歴史や史料が、単に三木市民のみには留まらない、より多くの人びとのアイデンティティを構成するものとして位置づけられることが可能となろう。その意味では、多様な人々が参加しながら史料の掘り起しが進められている現在行われている三木市での地域歴史文化活動は、まさに「現在の宝蔵文書」を創る「歴史実践」にほかならず、三木市の歴史文化の〈場〉はそうした「現在の宝蔵文書」創りの現場であると言う事ができよう。

註

（1）三木市史編さん事務局「新三木市史編さん事業の概要」『市史研究みき』二号、二〇一七年三月。

（2）三木郷土史の会については、進藤輝司「郷土歴史資料の蓄積に努めた「三木郷土史の会」二六年間の歩み―会誌『三木史談』の発行と『宝蔵文書』の解読等を中心として―」『市史研究みき』二号、二〇一七年も参照。

（3）「編集のあとに」『三木史談』二六号、一九九一年七月。なお執筆者は松村義臣氏である。

（4）旧玉置家住宅における襖下張り剥離・解読作業については、辻田政顕「旧玉置家住宅を活かした取り組み」『神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報LINK【地域・大学・文化】』四号、二〇一二年および久斗政光「市民グループによる襖の下張り文書作業と活用」第一一回歴史と文化をめぐる地域連携協議会報告、二〇一三年二月二日、於・神戸大学瀧川記念学術交流会館などを参照。

（5）辻田政顕「阪神・淡路大震災以降の文化財保全活動―人、まち、時代をつなぐ旧玉置家住宅―」独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館編『平成二七年度文化財防災ネットワーク推進事業―九州国立博物館の取り組み―』九州国立博物館、二〇一五年、一二六頁。

（6）川北健雄「三木市の中心市街地における歴史文化資源活用イベント―「ミキシル」について―」『神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報LINK【地域・大学・文化】』六号、二〇一四年。

（7）穂苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』御茶の水書房、二〇〇四年。

（8）歴史学研究会編『第四次 現代歴史学の成果と課題』績文堂出版、二〇一七年、全三巻のうち、第三巻は「歴史実践の現在」として充てられている。

（9）渡辺浩一『まちの記憶―播州三木町の歴史叙述』清文堂、二〇〇四年。